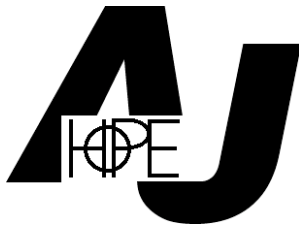


Japanese Welfare Society in Australia



Hope Connection Newsletter No.36

ホープコネクションニュースレター第36号 発行日2006年1月1日 発行者 Hope Connection Inc.

住所／郵便宛先 c/o Migrant Resource Centre, 40 Grattan St. Prahran VIC 3181 電話（電話相談兼用）0408-574-824

* Hope Connection Inc. はビクトリア州政府に登録された非営利非宗教の社会福祉団体です *

ホームページ : <http://members.optushome.com.au/hopec> e-mail : hopec@optushome.com.au

新年あけましておめでとうございます

一年を振り返って、昨年は皆様にとってどんな年でしたか。世界では、大きな津波や地震、ハリケーンや洪水といった深刻な自然災害が発生したり、あちこちでテロが起きるなど、心の痛むニュースが多くありました。また、次のテロのターゲットにメルボルンの名が挙がり、ここで暮らす私たちの間に緊張感と恐怖感を与えました。無差別に多くの命を奪う事件がどうか起こりませんようにと、本年は明るいニュースが増えることをただ願うばかりです。

さて、皆様はどのようにお正月を過ごされますか。長期で滞在されている方々の中にも、メルボルンで迎える真夏のお正月には、どうしても違和感を感じずにいられない方も多くいらっしゃる

のではないのでしょうか。夏時間で日も長く、BBQに代表されるように、野外での活動を楽しむ機会の多い季節になりました。今年のメルボルンは、例年の全豪オープンやF1に加え、コモンウェルスゲームの開催地となっています。昼間は日焼け止め対策をしっかりと、透き通るように晴れた乾いた夏を十分満喫してください。

ホープコネクションは今年、設立10周年を迎えます。これまでの私たちの活動実績をより多くの方々にご紹介し、そして、私たちが新たな気持ちで取り組んでゆく今後の活動の糧になるような催し物を、と記念事業の企画を進めています。今後とも、ご支援をよろしくお願い致します。

留学生調査 その4

ホープコネクションが約2年半かかって日本人高校生を対象に行った留学生調査について、前号ニュースレターに引き続き今回は、日本の家族、ホームシック、カルチャーギャップを中心にまとめてみたい。

1) 日本の家族

日本の家族とは、プリペイドのコーリングカードやEメール、携帯電話の普及によって、必要に応じて頻りに連絡を取っている。これらの通信手段のうち電話で話すケースが大半を占め、頻度は週、1、2回と答えた者が多かった。また話す相手は母親が多く、母親の方からかけてくるようである。中には親に心配かけさせないために、2週間に1回程度自分の方からかけるという学生もいた。父親とメールのやり取りを時々すると答えた者も少数いた。学生の方からかける場合、送金依頼や、送って欲しいものがあるときといった用事があって連絡を取るケースが多い。

留学中に経験したトラブルや悩みについては「相談」というより「普通に何でも話す」という様子が伺える返答が多くあり、相談事は内容によっては、むしろ家族ではなく、友人に話すとか答えた学生が多い。これは青年期初期の典型的特徴であろう。

電話やメールによる通信手段は、物理的「距離」のためにかえて家族との関係が新たに再構築され、それが好転した例も

ホープコネクション留学生調査チーム

見られた。以下に紹介するFさんは、日本にいた当時父親とはほとんど会話がなかったのに、留学してから父親との会話が復活した。

『お父さんには、前日本にいた時は全然喋らなかったけど、こっち来て今年になってから、なんか話すようになって、いろいろ話して。お母さんは前から時々。なんでお父さんと話すようになったかは自分でもちょっとわかんないけど、「なんか意外にちゃんと話せばわかるじゃないか、この親父」みたいな（笑）。』

中にはこちらで経験したことを何でも母親に報告・相談することによって、親子できちんと話す機会を持つことができ、それがお互いの理解を深めて親子の絆が強くなったと報告していた学生もいたし、母親の愚痴を聞いてあげるといった立場の逆点が見られるケースもあり、大人への行程が感じられる。

2) ホームシック

ホームシックの経験について尋ねたところ、全くなしという返答も少数あり、学校が楽しいから感じなかったと答えた学生もいた。しかし、多くはこちらに来たばかりのころ、あるいは、一時帰国してオーストラリアに戻ったばかりのころに家族や友人、また日本食、日本の漫画などが恋しくなると答えている。

そうした思いを、Gさんは次のように語っている。

『別に家って訳じゃなく、日本に帰りたい。もう、しょっちゅうですね。些細なことでも、「あ～、日本食食べたい。あ～、日本」とか思うし、日本の曲聴いて、「あ～、日本」。日本の漫画見て「あ～、日本」とか。もう、しょっちゅう、しょっちゅう。』

ホームシックの対処法については、我慢する、諦める、毎日の生活をきちんとする、という回答が得られた。実際に、Iさんは、

『電話して話すと余計帰りたくなるから、とりあえず毎日ちゃんと学校行って、そしたらいつの間にか、真面目になってた(笑)。多分、自分がちゃんとやることやってると、充実感ができて、別に帰りたくないかなあっていう気に。』

と話しており、他の学生も学校の課題に追われるようになるとホームシックは遠のいてゆく、と似たような経験を語っている。馴れない環境の中でホームシックは一時的に多くが経験するものであろうが、学校生活をこなしてゆくことで緩和されてくるのがわかる。

3) カルチャーギャップ

カルチャーギャップについては、来豪当初何に一番戸惑ったかをたずねてみたところ、電車が定刻どおりに来ない、電車のドアが手動、バス停のアナウンスなし、ショッピングセンターの閉店時刻が早い、食器を洗ってリンスをしない、何でもIDを見せる、タバコの自動販売機がない、マックで「チーズバーガーセット」と頼んだらコーラだけが来た、日本では「セット」と言うがこちらでは「ミール」という、、、などの日常なことから、医療システムで戸惑ったケースなどが語られた。Eさんは自分が病気になったときの体験を紹介してくれた。

『去年の11月も病気になっちゃって。すごい高い熱が出て。39度ぐらいの熱が1週間ぐらい続いて。で、四肢に斑点ができて、最初チキンボックスかなと思って。で、病院に行ったけど、わかんない。オーストラリアって病院に行かなくてメディカルセンターに行くじゃないですか。そういうところに行って、救急で行ったのに1時間以上待たされて。寒いのにベッドもくれないで。日本だったらベッドくれるじゃないですか。1時間以上待たされて、やったのは血液検査だけで、シロップ飲まされてそれで終わり。仕方ないから他の所に行ったら取りあえず市販のパナドール、それひと箱ぐらい飲まされてそれでやっと治ったの。こっちの病院のシステムってあまりよくないなあ。わたしが足を痛めたときも取りあえずフィジオに行けというんですよ。日本に帰ってレントゲンとって、全然違って。』

またシャワーの水が余り使えないといった生活習慣上の違いや、魚類の少ない食生活を指摘した学生もいた。オーストラリアに来る前に抱いていたイメージと、実際に生活して知った現実とのギャップについては、様々な感想が語られた。たとえば、Gさんは、

『日本人は外人を美化しすぎてると思いましたね。日本人は「外人は皆優しくて、皆に平等で」とかって、思ってません？私の周りってか、私がそうなのかな？「外人は何でも、ALL OK！」みたいな感じがあったんですけど、来たらそうでもなかったです。ホントに、ある意味変な意味で日本より結構差別、っていうか、嫌な奴は嫌な奴なんだなー、っていうか。良い人は良い人で、嫌な奴は嫌な奴で、ホントに差が激しいっていうか。だから、美化し過ぎてたな、と。そんなに良い所じゃない、外国は。』

と、リアリスティックな目で観察している。

さらに、他の国から留学生として来ている学生や、移民の学生と交流することで、異なった世界観に接し戸惑った例もある。以下のC君の体験は日本人が『マルチカルチャリズム』を実感する事例であろう。

『前に9月11日にアメリカの世界貿易センターがハイジャックで襲われた事件がありましたよね、その時に、友達が凄いアメリカのことを嫌ってるってことを初めて気付いたんですよ。その事件を見て、喜んでる友達が何人かいたんですよ、中国の人とか。それまで、僕は日本で何にも知らないで、日本は皆アメリカ大好き大好きって感じだったんで、僕も嫌いではなかったんですけど。いろいろ中国の人とか、仲良かったアフリカの人とかは、アメリカに酷いことされたってことで、見方が違う、特にメルボルンはいろいろ人種が集まってる街なんで、そういうところで僕はすごいビクビクして、戸惑いましたね。』

このように、日本で存在する固定観念など、留学前は全く疑問を感じずに当たり前と思っていたこと、信じて疑わなかったことが、一歩日本を出ると常識でなくなることに對する驚きを、日常の些細なことから、また学生同士の交流の中から経験しているのがわかる。次回(最終回)は、オーストラリアに来て自分がどう変わったか、将来留学を考えている人へのアドバイスなどを中心に報告する予定。

ファミリーバイオレンスについて

先日、JCV、実りの会主催の標記勉強会に参加してきました。今回は、Victoria Policeの家庭内暴力の調査官、検察官

の方からオーストラリアのファミリーバイオレンスの現状について、さらに自分の身に起こった時の対処法についてもお話を

伺いました。

2004年7月から2005年6月の統計で26,162件のファミリーバイオレンスが報告され、その内の80パーセントは被害者が女性と報告されています。統計のうちの11,259件は被害者、もしくは加害者の家の中で起こっており、うち185件は犯罪として処理されました。この数字は前年度に比べて5パーセントの増加とされていますが、これは件数が単純に増えたというより、むしろテレビやメディアによる「女性に対する暴力に対し Australia says no」というアピールにより報告件数が増えたのであろうとのことでした。

基本的に、バイオレンス＝肉体的に受ける暴力と考えがちですが、ファミリーバイオレンスとはたたく、なぐる、怪我をさせるなどの他にも、精神的に恐怖を与えることもバイオレンスの一部となります。例えば暴力的な言葉を繰り返したり、全てのことに対して批判をしたり、相手の来客（友人など）を拒んだり、ストーカーをすることも精神的な暴力を与えたとみなされます。そのほかにも生活費を渡さないとか、持っているお金、財産を取り上げることなども、経済的暴力といった、ファミリーバイオレンスの一部になります。

家庭内暴力の中でも報告件数は少ないものの実際はもっと被害が広がっているだろうと予想されているのが、老人に対する家庭内暴力のケースです。外出の頻度の減少により、コミュニティから隔離していることを切り口にし、「我慢」したり「仕方がない」といってあきらめてしまう世代であったり、移民の方で英語がしゃべれないことから公にならないことが多く、暴力を受けていたり、財産を奪われてしまったりするケースが水面下で起こっているようです。

さて、もしも自分の身にこのような暴力が起こった時にはどう対処したらいいのでしょうか。

1. 緊急事態の時は‘000’に電話

警察に電話し、助けを求める。” Japanese interpreter please!” と言えば通訳を呼び出してくれる。もしもその電話中に何か起こってしまっても、電話は切らずに受話器は上げておくこと。そうすれば逆探知をし、助けに来てくれる。

警察では大きく分けて3つの処置を取ることができる。

- 1) 刑事事件として告発する。
- 2) 民事事件－被害者の安全が脅かされると警察が判断した場合には Intervention Order (仲裁命令) がかけられる。例えば被害者の家、職場などに加害者は200m以内に近づくことはできないなど。
- 3) カウンセリングや、サポートエージェンシーの紹介をしてくれる。例えば、移民の人は通訳を頼むことができ、加害者を Anger Management などのカウンセリングに紹介してもらうなど。

2. 近くの交番に助けを求める

“I would like to see a sergeant; Family violence liaison officer please” と言ってファミリーバイオレンスの担当者を必ず呼んでもらうこと。その方が話がスムーズにいくという。

3. サポートエージェンシーに行く

◆ Immigration Women’s Domestic violence Service

Website: www.iwdvs.org.au

Email: iwdvs@infoxchange.net.au

Phone: 9898-3145

家庭内やパートナーの間でのバイオレンスは本人も隠してしまったり、それが日常になってしまい気がつかない場合が多いかも知れませんが、オーストラリアはバイオレンスに対して、NO!と言います。自分を守るちょっとしたお話でした。

(会員 A)

引越し業社の料金、払い過ぎてしていませんか？

これからお話しする事は私自身が経験したことです。引越し業者を利用したのは今回が2回目で、かなり前になりますが、最初の時は先ず見積もりを出してもらい問題は生じませんでした。今回は業界では大手といわれている会社を使いましたが、まさかいいかげんな勘定の仕方ですと請求してくるとは想像していませんでした。

我が家にあった家具2点を我が家から10キロメートルほど離れたAさん宅に移動することになり、数件の引越し業社に見積もりを出してもらいました。本格的な引越しではないのでこの会社も電話でおおよその見積もり(時給計算)を出してくれました。梱包などの細かい作業はなく、我が家とAさん宅に都合のよいように、その業界では大手のある引越し会社に頼むことにしました。移動してもらう当日までの連絡等はスムーズに行われ、家具移動当日も手際よく運び出し、Aさん宅でも指定した場所に置いてくれました。

ここまではよかったです。ところが最初にAさんに請求し

たのは3時間分の労賃でした。事前に私から「最高でも2時間」という知らせを受けていたAさんは不審に思い、問い詰めたところ「では2時間半分でいい」との返事でした。Aさんは、「完全に納得はできなかったものの料金は支払った」と、折り返し私に電話してくれました。私はこのようないい加減な請求がどこでも行われているのか疑問に思いはじめました。先ず会社に問い合わせるため、会社から我が家までの距離、所要時間など実際に調べました。その後会社の担当課に問い合わせたところ、「課長から連絡を入れる」との返答だけで電話はかかってきませんでした。

その後、電話、ファクスなど問い合わせ回数は計7回にも及びました。しかし、返事はいただけませんでした。料金を受け取ったらその後の対応はいいかげんといった会社側の態度にさらに疑問がわき、引越し業社を利用する多くの方々の為にも思い最終手段の法律に則って正当性を正すことにし Victorian Civil And Administrative Tribunal

(VCAAT) に手続きをとりました。VCAAT から私が出した申告受領内容と聞き取り日の告知報告書が引越し会社へと送付され、私にも複写が送られてきました。私も指定された日に出廷し、申告理由を述べるようになっていましたが、出廷日寸前になって引越し会社から「顧客の申告を受け入れ示談で解決する」という知らせが Tribunal へと提出され家具移動に掛かった妥当な時間（こちらが申し出た2時間）との差額と Tribunal 申請料金が小切手で送られてきました。

金額こそ多額ではありませんでしたが、請求の仕方、対応の

いい加減さに納得いかなかった一件でした。今回、私が経験した家具移動スキャンダル?! は落ち着きましたが、皆さんは、このようなことがあっても疑問を持たずに、いわれるままの請求額を支払っていませんか？

最後に業社を頼む時のヒントをあげてみます。

- 1) 数件の業社から見積もりを取る。
- 2) 引越しにかかった所要時間をチェックする。
- 3) 不信な点がある場合、支払いは会社にお問い合わせしてから。

(会員 Y)

ホープコネクションからのお知らせ

ホープコネクション・カルチャースクール 『火の用心、そのまた用心』

古くから日本ではこわいものの代名詞として「地震」「雷」「火事」「オヤジ」と言います。オーストラリアでは地震の心配は殆どなく、オヤジの権威も最近はどうもかもかもしれませんが、火事はまだまだ本当に恐ろしいもの。今回のカルチャースクールでは、Metropolitan Fire and Emergency Services Board から、Community Education Officer においでいただき、火の用心のためのヒントから、万一火災に巻き込まれた場合にどうすればよいかまで、詳しくお話を伺います。これを機会に、お宅の防災計画についてじっくり考えていただければと思います。ご家族連れでお気軽にどうぞ。

日時： 2006年2月18日(土) 午前10時30分～午後0時30分

場所： Ross House
247 Flinders Lane Melbourne 3000
(Swanston St. と Elizabeth St. の間です。 Flinders Station から徒歩2分。)

費用： 一人5ドル(コーヒー・紅茶、資料付)

お申し込み・お問い合わせ： 0408-574-824 日本語電話相談(月～金曜日 10時～15時)まで。
または、E-mail: hopec@optushome.com.au まで。

チャイルド・ケアご希望の方、こんなことが聞きたいとご希望などありましたら、お申し込みの際にお知らせください。会場・資料準備のため事前の申し込みをお願いいたします。当日の午後9時以降、0408-574-824 にて当日参加の受付もいたしますが、資料がお渡しできない場合もありますことをあらかじめご了承下さい。

ホープコネクション電話相談のご案内

ホープコネクションでは、96年8月より日本語での電話相談を行っています。生活の中での困りごとのある方、相談相手のない方、悩み事を誰かに聴いてもらいたい方、お電話をいただければ、訓練を受けたボランティアの相談員が一緒に考えます。内容によっては専門家にご紹介もいたします。さらに現在ではマイグランドリソースセンター(移民のための窓口となる公共団体)をはじめとする、オーストラリアのサービス機関とも協力、連携を深め、ネットワークを広げています。電話は匿名で構いません。秘密は厳守致します。(相談は無料ですが、携帯電話を使用しているため、時間単位の通話料金がかかります。)

電話番号：0408-574-824

受付時間：月～金曜日 午前10時～午後3時まで

Special Thanks to – 庭野平和財団、Good Neighbours Trust Fund、South Central Region Migrant Resource Centre、Moshi-Moshi ページ Pty Ltd.、メルボルン在住匿名希望の方、Victoria Multicultural Commission、伝言ネット、ユーカリ出版、Education Logistics、JCV、豪日協会、佐川義人、Timothy McDonald、Michal Morris、洋子マーフィー、NEC、メルボルン日本人会、大隈良譲、Sandra Roeg、SBS 日本語放送、天野行哲、加茂前千代、Christine J. Rodan、吉澤通明、山本和儀、Mark Preston、Stacey Steele、鈴木月子、田村真美、村越庸子、Jennie Rice、City of Stonnington、City of Port Phillip、Kiyomi Campbell (敬称略・順不同)